

称号及び氏名	博士（言語文化学） 賽希雅拉図
学位授与の日付	平成26年3月31日
論文名	日本語とモンゴル語の主題マーカ－の対照研究
論文審査委員	主査 張 麟声
	副査 山東 功
	副査 高木 佐知子
	副査 角道 正佳 大阪大学（名誉教授）

要旨

本論文は日本語とモンゴル語の主題マーカ－の対照研究である。両言語の主題マーカ－について、典型的な主題マーカ－と非典型的な主題マーカ－に分けて考察した。さらに、典型的な主題マーカ－と非典型的な主題マーカ－について、主題を表す用法と主題を表さない用法の2つに分けて述べた。これを一覧で示すと、次のようになる。

典型的な主題マーカ－	{	主題表示機能
		非主題表示機能
非典型的な主題マーカ－	{	主題表示機能
		非主題表示機能

本論文は、序章から終章までの12章から構成されている。12章のうち、序章と終章を除く第1章～第10章を、3部に分けて述べた。これを表で示すと、次のようになる。

表1 本論文の構成

第1部	日本語とモンゴル語の主題マーカ－に関する先行研究	日本語	第1章 日本語の先行研究
		モンゴル語	第2章 モンゴル語の先行研究
第2部	モンゴル語の主題マーカ－	典型的な主題マーカ－	第3章 主題表示機能
			第4章 非主題表示機能
		非典型的な主題マーカ－	第5章 主題表示機能
			第6章 非主題表示機能

第3部	日本語とモンゴル語の主題 マーカ―の対照研究	典型的な主題	第7章 主題表示機能
		マーカ―	第8章 非主題表示機能
		非典型的な主題	第9章 主題表示機能
		マーカ―	第10章 非主題表示機能

次に、本論文の主な内容を章ごとに記す。

序章——本論文の研究の対象・目的・意義、研究方法、構成を述べた。

第1章——日本語の主題マーカ―の研究史と研究の現状の章では、**1)**典型的な主題マーカ―、**2)**非典型的な主題マーカ―の2点について述べた。

1)の典型的な主題マーカ―の部分では、「は」についての先行研究を、本論文の構成に合わせて、次の**3**種類に分けて概観した。

- ① 主題を表す用法に関する研究
- ② 対比を表す用法に関する研究
- ③ 条件を表す用法に関する研究

2)の非典型的な主題マーカ―の部分では、非典型的な主題マーカ―には、①無助詞、②「とは」類、③「については」類、④「としては」類、⑤「におかれは」類、⑥「なんか」類、⑦「ったら」類、⑧「なら」、「といえは」類、⑨「となると」類、⑩「だが」の**9**種類があると見た研究を中心にまとめた。

第2章——モンゴル語の主題マーカ―の研究史と研究の現状の章では、**1)**典型的な主題マーカ―、**2)**非典型的な主題マーカ―、**3)**先行研究の問題点、という**3**点について述べた。

1)の典型的な主題マーカ―の部分では、bol についての先行研究を、本論文の構成に合わせて、次の**3**種類に分けて概観した。

- ① 主題を表す用法に関する研究
- ② 対比を表す用法に関する研究
- ③ 条件を表す用法に関する研究

2)の非典型的な主題マーカ―の部分では、**3** 人称所属小辞 ni を主題マーカ―と主張した研究、gegči bol、gedeg bol、gedeg ni などの主題マーカ―を扱った研究を概観した。

3)の先行研究の問題点の部分では、①bol は主格助詞ではなく、主題マーカ―である、②**3** 人称所属小辞 ni は主題マーカ―ではないと指摘した。

第3章——モンゴル語の典型的な主題マーカ―の章では、bol の主題を表す用法について、次の**6**つのことを明らかにした。

- 1) 主題を表す bol は属性叙述文に使われる。
- 2) bol で表される主題には、格成分が主題になっているものがある。

- 3) bol で表される主題には、格成分の連体修飾部が主題のものがある。
- 4) bol で表される主題には、被修飾名詞が主題になっているものがある。
- 5) bol で表される主題には、節が主題になっているものがある。
- 6) bol で表される主題には、格関係に戻せない破格の主題がある。

第4章——モンゴル語の典型的な主題マーカーの非主題表示機能の章では、bol の非主題表示の用法における、1)対比を表す用法、2)条件を表す用法の2つの用法について詳しく述べた。

1)の対比を表す用法の部分では、bol の対比の用法について、①明示的な対比を表す用法がある、②暗示的な対比を表す用法がある、③対比の bol は格成分に付く、④対比の bol は副詞的成分に付く、⑤対比の bol は従属節に付く、⑥対比の bol は述語成分の中に使われる、のようなことを明らかにした。

2)の条件を表す用法の部分では、条件を表す bol について、①恒常条件を表す、②仮定条件を表す、③確定条件を表す、などの用法があると主張した。

第5章——モンゴル語の非典型的な主題マーカーの主題表示機能の章では、1)言葉の解説を行う文の主題マーカー、2)限定された叙述を行う文の主題マーカーの2種類の主題マーカーについて考察した。

1)の言葉の解説を行う文の主題を表す主題マーカーの部分では、意味と用法が日本語の「って」に近いモンゴル語の①gejü の主題を表す用法、意味と用法が日本語の「とは」「というのは」に近い②gesen bol、③gedeg bol の主題を表す用法について述べた。

2)の限定された叙述を行う文の主題マーカーの部分では、意味と用法が日本語の「については」に近いモンゴル語の tuqai には、言語活動や思考活動の対象を主題として提示する用法があると指摘した。

第6章——モンゴル語の非典型的な主題マーカーの非主題表示機能の章では、1)言葉の解説を行う文の主題を表す主題マーカーの非主題表示機能、2)限定された叙述を行う文の主題を表す主題マーカーの非主題表示機能について考察した。

1)の言葉の解説を行う文の主題を表す主題マーカーの非主題表示の部分では、①gejü の非主題表示の用法、②gesen bol の非主題表示の用法、③gedeg bol の非主題表示の用法について述べた。

2)の限定された叙述を行う文の主題を表す主題マーカーの部分では、モンゴル語の tuqai の非主題表示の用法には、対比を表す用法などがあると述べた。

第7章——典型的な主題マーカーの主題表示機能の章では、日本語の「は」とモンゴル語の bol の主題を表す用法の類似点と相違点について、次の7つの視点から考察した。

- 1) 主題マーカーと属性叙述文・事象叙述文

- 2) 格成分が主題になっている文
- 3) 格成分の連体修飾部が主題になっている文
- 4) 述語名詞の連体修飾部が主題になっている文
- 5) 被修飾名詞が主題になっている文
- 6) 節が主題になっている文
- 7) 破格の主題をもつ文

主題を表す「は」と bol は、2)、3)、5)、6)、7)の点ではほとんど類似しているが、1)と4)の点では大きく異なる。すなわち、1)は、主題の「は」は、属性叙述文にも事象叙述文にも使われるが、主題の bol は属性叙述文にしか使われない。4)は、「は」には、述語名詞の連体修飾部を主題として提示する用法はあるが、bol にはこのような用法がない、ということである。

第8章——典型的な主題マーカーの非主題表示機能の章では、日本語の「は」とモンゴル語の bol の非主題表示の用法における類似点と相違点について、1)対比を表す用法、2)条件を表す用法の2つの視点から考察した。

1)の対比を表す「は」と bol の類似点と相違点については、①明示的な対比、②暗示的な対比、③「は」と bol で対比を表せる格成分、④「は」と bol で対比を表せる副詞的成分、⑤「は」と bol で対比を表せる従属節、⑥「は」と bol で対比を表せる述語成分の5つに分けて述べた。

2)の条件を表す「は」と bol については、日本語の条件を表す「ば」は「は」から発展変化したことを述べた上で、日本語の「ば」とモンゴル語の bol の条件表示用法における類似点と相違点について、①恒常条件を表す用法、②仮定条件を表す用法、③確定条件を表す用法の3つに分けて述べた。

第9章——非典型的な主題マーカーの主題表示機能の章では、日本語とモンゴル語の1)言葉の解説を行う文の主題を表す主題マーカー、2)限定された叙述を行う文の主題を表す主題マーカーの類似点と相違点について述べた。

1)の言葉の解説を行う文の主題を表す主題マーカーの部分では、①日本語の「って」とモンゴル語の *gejü* の主題表示機能における類似点と相違点、②日本語の「とは」「というのは」とモンゴル語の *gesen bol*、*gedeg bol* の主題表示機能における類似点と相違点について見た。

2)の限定された叙述を行う文の主題を表す主題マーカーの部分では、日本語の「については」とモンゴル語の *tuqai* の主題表示の用法における類似点と相違点について見た。

第10章——非典型的な主題マーカーの非主題表示機能の章では、日本語とモンゴル語の1)言葉の解説を行う文の主題を表す主題マーカーの非主題表示機能、2)限定された叙述を行う文の主題を表す主題マーカーの非主題表示機能における類似点と相違点について述べた。

1)の言葉の解説を行う文の主題を表す主題マーカの部分では、①日本語の「って」とモンゴル語の *gejü* の非主題表示機能における類似点と相違点、②日本語の「とは」「というのは」とモンゴル語の *gesen bol*、*gedeg bol* の非主題表示機能における類似点と相違点の2つに分けて考察した。

2)の限定された叙述を行う文の主題を表す主題マーカの非主題表示機能の部分では、日本語の「については」とモンゴル語の *tuqai* の非主題表示の用法について、①明示的な対比を表す用法、②修飾名詞を提示する用法があると指摘した。

終章——本論文のまとめと今後の課題について述べた。今後の課題としては、その他の主題を表す形式、主題マーカと文体との関係、事象叙述文の中の主題の形式、過去のモンゴル語との対照などを取り上げた。

(終わり)

学位論文審査結果の要旨

1 この論文の意義

日本語の「は」についての研究史は長い。欧米で樹立された記述言語学の手法を用いて、助詞を格助詞、副助詞、接続助詞、係助詞、終助詞、間投助詞の6種類に分けたうえ、「も」「ぞ」「なむ」「こそ」「や」「か」と並んで、「は」を係助詞の一つとし、その本格的な研究の嚆矢をなした山田孝雄(1908)『日本文法論』から計算しても、100年以上経過している。

この100年以上の間に、「は」の意味・機能をはじめ、その発生の経路、格助詞との相関関係、「牡蠣料理は広島が本場だ」といった文型との相関関係、「属性叙述文、事象叙述文」といった表現類型との相関関係、いろいろな従属節との相関関係といったさまざまな視点から、膨大な数の研究が進められ、大きな成果が収められている。だが、角度を変えていえば、益岡隆志(2004)『主題の研究』(くろしお出版)、張麟声(2011)「「は」のような主題マーカと言語語順との相関関係について」(KLS第30号)の数点以外は、すべて日本語に限定した記述的研究であり、世界の諸言語の中において、日本語の主題マーカの特徴を捉える視点は、いささか欠けているといわなければならない。

とはいえ、一言語の主題マーカに関する記述的研究としては、世界一のレベルに達しているということは間違いない。このような日本語の研究事情に対して、モンゴル語の主題マーカである *bol* については、1970年代以来、取り上げられるようになったものの、成果は質量とも日本語のそれとは比べものにならない。その遅れの要因は、次の2点にあるとあってよからう。

- (1) モンゴル語が国語であるモンゴル国が、中国の清王朝から独立したのは、わずか百年ほど前のことであり、その人口は、現在でも **280** 万あまりしかない。確かにその隣の中国の内蒙古自治区でも、モンゴル族の人は **500** 万あまり生活しているが、国の公用語が中国語であるために、モンゴル族でありながら、モンゴル語を話せない人がたくさんいると聞く。こういう制約があるために、研究史が短く、研究者が少ない。
- (2) 書き言葉において、日本語では、助詞を従えない名詞句が認められないことになっているが、モンゴル語ではそうではない。したがって、主題や対比をとりたてる文脈であっても、モンゴル語では **bol** の使用が必須ではない。そのために、使用の頻度が低く、研究者の興味を強くそそる研究対象にはなりにくい。

以上、日本語の主題マーカ―とモンゴル語の主題マーカ―における研究の現状を述べたが、このような現状に挑戦すべく、賽希雅拉図氏の博士学位申請論文は、日本語学の世界で開発された主題マーカ―を記述する枠組みや検証の方法を真摯に学び、対照研究の手法を用いて、モンゴル語の主題マーカ―の綿密な記述を成し遂げた。現時点におけるモンゴル語の主題マーカ―に関するもっとも体系的且つ詳細な記述研究になっているという点において、この論文の学術的意義は大きい。

また、この論文の二番目の学術的意義は、日本語との対照研究を通して、日本語の主題マーカ―である「は」の性格を相対化して捉えることができ、世界の言語を視野に入れて、主題マーカ―の発生のメカニズムの解明に大きく寄与しているということである。主題マーカ―の発生に関しては、その動因を他動詞述語文の構造に求める説と名詞述語文の構造に求める説が併存している。15世紀までの日本語に、他動詞述語文の「主語」に「は」がつくことがないという学説に加えて、中国で話されている景頗語や彝語の主題マーカ―も名詞述語文と形容詞述語文にしか使われなかったために、主題マーカ―の発生の動因を名詞述語文に求めるべきだという主張が有力視されているが、まだ定説とまでは至っていない。

現代朝鮮語は現代日本語と同じく、他動詞述語文の主語にも主題マーカ―が付くが、その古代の姿に関しては、まだ解明されていない。日本語と違い、ハンダによる文章史がたいへん短いことが、その方面での研究を難しくしているのである。満州語が死語になった今、モンゴル語は、日本語、朝鮮語に一番近い、話し手が百万以上の **SOV** 型言語である。そのモンゴル語の主題マーカ―である **bol** が、属性を表す名詞述語文や形容詞述語文には使われるものの、他動詞述語文をはじめとする事象を表す「事象叙述文」という表現類型にまったく用いられないということを、賽希雅拉図氏のこの博士論文が究明したことにより、上述の主題マーカ―の発生の動因を名詞述語文に求める学説が強く支持され、主題マーカ―の発生の原理に関わる次のような主張の合理性がより有力視されるようになるのである。

「**SVO** 型言語においては、主題と述語名詞の間に来る「コピュラ」が主題と叙述を二分する主題マーカ―の役割を果たし、本格的な主題マーカ―の生起をブロックするため、主題マーカ―が発達しにくい。一方、**SOV** 型言語では、「コピュラ」は主題と叙述の間にはなく、文末に来るので、主題マーカ―の生起をブロックすることがない。

したがって、主題マーカーが発達しやすい。」

2 この論文の評価

この論文は、テーマの選定、研究の方法、先行研究の取り扱い、論述の展開、研究の結果のそれぞれの項目について、次のように評価できる。

テーマの選定：モンゴル語の主題マーカーの緻密な記述が、モンゴル語学にとってだけでなく、主題マーカーの存否と SOV 型言語、SVO 型言語といった言語の類型との相関関係をとらえることにとっても、たいへん重要である。この学術性が高い研究課題に挑戦したことをまず高く評価したい。

研究の方法：この論文は、「言語の記述的研究を助けるための対照研究」というジャンルの対照言語学的手法を用いて、まとめられたものである。対照言語学は、本質的には独自の目的を持つ言語学の一分野というよりも、さまざまな研究目的に応じて用いることができる一種の研究手法である。その他の分野についても同じことがいえるが、世界に存在する約 6000 の言語に関する記述研究の到達度は、決して一様ではない。したがって、その中の記述研究が進んでいる言語の研究において開発された方法やモデルあるいは研究の成果を参考にして、記述的研究が進んでいない言語のことを研究していくのが、この「言語の記述的研究を助けるための対照研究」なのである。賽希雅拉図氏は、このような対照言語学的手法を用い、具体的には、野田尚史(1986)『「は」と「が」』(くろしお出版)など数点の代表的な研究をよりどころとして、作業を進め、モンゴル語の記述言語学のレベルを格段に引き上げている。

先行研究の取り扱い：この論文にとっての先行研究は、大きく日本語の主題マーカーに関する先行研究とモンゴル語の主題マーカーに関する先行研究に分かれる。前者に関しては、山田孝雄(1908)『日本文法論』から最近の集大成したものまで、じっくり目を通し、研究の視点や手続きを真摯に学んだ。また、後者のモンゴル語の主題マーカーの先行研究に関しては、日本国内のものというまでもなく、モンゴル国内のものも、中国国内のものも、全部入手して批判的に読み通し、研究の現状を把握している。

論述の展開：この研究には重点が二つあり、一つは記述があまり進んでいないモンゴル語の主題マーカー自体の研究、今一つは日本語とモンゴル語の対照研究を行い、世界の言語に共通して見られる主題マーカーの類型的性格をとらえることである。賽希雅拉図氏の博士論文では、先行研究を取り上げた第 1 部に続き、この二つの重点をそれぞれ第 2 部と第 3 部の研究テーマとしている。その第 2 部に関しても、第 3 部に関しても、典型的な主題マーカーの主題表示機能、典型的な主題マーカーの非主題表示機能、非典型的な主題マーカーの主題表示機能、非典型的な主題マーカーの非主題表示機能の 4 章に分けて論を進め、論理的な記述に徹したものになっている。その上、モンゴル語の用例に関して、逐語訳とセンテンスレベルの翻訳の両方をつけたことも、論文の明晰さの向上に寄与している。

研究結果：この論文の研究結果は、大きく分けて、モンゴル語の主題マーカーの記述に関するものと、日本語の主題マーカーとの対照研究を通して得られた言語の主題マーカーの一般的な性格を解き明かすものとに分けられる。前者に関しては、この論文は、

モンゴル語の主題マーカーに関する現在の一番体系的で緻密な研究になっていると言える。また、後者に関しては、1で述べたこと以外に、以下の2点も特筆に値する。

- (1) 「あなたが行けば私もいく」における条件従属節の節末に来る「ば」が「は」に由来する学説が有力視されているが、完全に定説になっているとはまだ言えない。この博士論文では、モンゴル語の **bol** は、主題をとりたてたり、対比を示したりする際には日本語の「は」に対応し、一方、条件従属節を示す時点では日本語の「ば」に対応するという事実を示している。「ば」が「は」に由来する学説を間接的にサポートしたもものとして評価できる。
- (2) 主題マーカーの対比用法において、「は」に比べて、モンゴル語の **bol** は、さまざまなレベルで使用領域が狭いということをこの論文が明らかにしている。例えば、「私は牛肉は食べるが、豚肉は食べない」のように、格成分をとりたてる用法では、「は」も **bol** も使われるが、一方、「少くは食べてよ」における副詞成分をとりたてる用法は、「は」には持つが、**bol** にはない。この論文のこういった重要な結論により、言語における「対比」という領域にも階層が考えられるということが明らかになり、よって、主題マーカーの研究において新しい一局面が成立したことになる。

3 審査委員会の結論

この論文は、堅実な対照言語学的方法を用いて、豊富な用例を観察して、帰納的に規則を提示し、説得力の高い結論を導いている。

本審査委員会は、全員一致で、この論文が以下の人間社会学研究科の博士論文審査基準をすべて満たし、博士学位の取得にふさわしいものであると判断する。

- 1) 研究テーマが絞り込まれている。
- 2) 研究の方法論が明確である。
- 3) 先行研究についての調査が十分に行われ、その知見が踏まえられている。
- 4) 結論に至る議論の展開が十分な論拠に支えられ、かつ論理的である。
- 5) 当該分野の学術研究の進展に貢献する、独創性を備えた内容である。